2016年度 土を考える会夏期研修会 北海道


ともにマイクを握った齊藤義崇氏


司会進行を務めた長門茂明会長

▶7月7、8日
（北海道上富良野町）

文／齊藤義崇

北海道土を考える会は7月7、8日の両日、39回目となる夏期研修会を開催した。北海道の6月は記録的な曇天と降雨で夏らしい日がなかった。7月7日は晴れ。気温も高く、いよいよ北国の遅い夏の到来である。絶好の農作業日和に、後ろ髪を引かれながらも、全道各地の農業者がこの日、上富良野「土の館」に集結した。参加者は事務局、講師を含めて55名だった。

研修会のメインテーマは「有機物施用による持続型農業について考える」である。某バラエティのオープニングテーマが開幕を知らせ、長門茂明会長と私の掛け合いで開会を宣言した。

「篤農家と掛けまして、オリンピック選手と説きます」

「その心は、知力（地力）・体力（耐力）抜群です」

緑肥を巧みに利用する土づくり

初日の第1幕は「有機物施用による持続型農業について考える」と題した、パネルディスカッションからスタートした。玉手博章氏（道央支部）、尾形恭男氏（中央支部）、奥山和徳氏（十勝支部）、小原意玲氏（中央支部）、佐藤博志氏（十勝支部）の5名がパネリストとして登壇し、自己紹介の後、それぞれが実践している土づくりについて話した。

長門会長の巧みな司会進行により、5名の土づくりへのこだわりが論理的に浮き彫りになっていった。堆肥へのこだわり、緑肥の選び方、緑肥すき込みの耕起深に技あり‼5名のすき込む方法と、その道具への愛着も紹介された。会場からも積極的な質問や意見が多く、とくに緑肥については、品種・すき込み時期など多種多様であった。有機物のすき込みと言っても、個性の出る技術であることが証明されるディスカッションであった。

第2幕は、緑肥のすき込み作業を、ホワイト農場で実際にやってみるという企画だ。つまり、実践編である。

実証区は、緑肥の立毛すき込みが2パターンで、20インチ4連のプラウと、2段耕プラウを使用した。また、緑肥をチョッパーでカットし表層混和する2パターンには、ディスクとスタブルカルチが用意された。最後に緑肥処理をスタブルカルチとカットロータリー、カットロータリーの2パターンを加え、全6パターンで緑肥すき込みを実証していった。

解説員は引き続き、長門会長と私が務めた。参加者とのディスカッションは青空教室のようで、解説に納得したとうなずく人、日ごろの悩みを質問して解決する人、積極的に考え方を述べる人と、大いに賑わった。

初日の最後は「最新の緑肥事情」と題して、雪印種苗㈱の藤田氏より、緑肥の品種や使い方、最新の研究テーマを中心に小1時間の講習会が行なわれた。とくに緑肥が病原の低減につながるという解説には、会場からも積極的な質問があり、緑肥利用に期待する声が多く聞かれた。

また、昨今のセンチュウには抵抗性品種の作付け以外に対策がないことから、緑肥の効果にも期待が高まっている。連作などによる病害に悩む参加者も多く、初日の緑肥を中心とした「有機物施用の土づくり手法」の企画はまさにタイムリーだった。

休憩を挟み、経営者交流会が催され、モクモクと立ち上るバーベキューの煙と満天の星空の下、笑い声が夜遅くまで響き渡っていた。

2日目は視野を広げる勉強会

2日目は2本の講演による勉強会のプログラム。初めに「将来を見据えた攻めの農業～海外から見た北海道農業の強みと弱み～」と題して、北海道農政事務所の佐藤雄一氏より講演をいただいた。同氏の話を聞くのは、北海道道央支部の冬期研修会に続いて2回目だ。的確なデータを示し、北海道農業のポジションをわかりやすく解説した。



1 初日第１幕のディスカッションの様子　2 ～ 6 登壇したパネリスト陣。順に玉手博章氏（道央支部）、尾形恭男氏（中央支部）、奥山和徳氏（十勝支部）、小原意玲氏（中央支部）、佐藤博志氏（十勝支部）　7 第３幕の講師の雪印種苗㈱札幌営業所の藤田所長



8 実践編の青空教室の様子。参加者らの熱心な視線が印象的だ　9 それぞれの試験区で耕深を測り、断面を観察した　10 カットロータリーの効果も比較対象に挙がった　11 トラクターにそれぞれの作業機を装着して実際に走行するのが青空教室のメリット



12 ２日目の講師、佐藤雄一氏　13 イタリアの稲作について話した笹原和哉氏　14 北海道各地から集結した参加者の集合写真

私たち北海道の農業者は、「北海道は農業王国である」と自負しがちであるが、気候以外にも流通システムや商品力などの弱点があることを指摘され、気づきを与えられたように思う。また講演のなかで気になったのは、世界の農業情勢だ。世界的な農産物反収は横ばいとの見通しだが、アジアの大国をはじめ、人口増による穀物需要が増加し、世界的な食料不足は間近に迫っているようだ。私はどの作物であれ、より技術革新を進めなければと聞き入った。

次に２つ目の講演として農研機構東北農業研究センターの笹原和哉氏より「イタリアの水稲直播経営から導く技術開発の課題」についてお話しいただいた。乾直人（乾田直播に取り組んでいる仲間たち）は待ってましたとばかりの真剣な面持ちになった。およそ１時間にわたって、イタリアの水稲直播の歴史、現状、課題の説明に聞き入った。

日本より早く水稲直播の経営・技術の課題を克服したこと、今後の展望など、日本の稲作にも通じる技術改革や研究意図のよくわかる講演だった。質疑の時間が足りなく感じるような展開だった。

その後、北海道土を考える会の総会が行なわれ、２日間にわたる全日程は幕を閉じた。